

「Dr. パルナサスの鏡」

★★★

2010（平成22）年2月11日鑑賞＜TOHOシネマズ梅田＞

監督・脚本：テリー・ギリアム

トニー（謎の青年）／ヒース・レジャー

鏡の向こうのトニー#1／ジョニー・デップ

鏡の向こうのトニー#2／ジュード・ロウ

鏡の向こうのトニー#3／コリン・ファレル

パルナサス博士（科学者）／クリストファー・プラマー

ヴァレンティナ（パルナサス博士の美しい娘）／リリー・コール

アントン（曲芸師の若者）／アンドリュー・ガーフィールド

パーシー（小人）／ヴァーン・トロイヤー

Mr. ニック（悪魔）／トム・ウェイツ

2009年・イギリス、カナダ映画・124分

配給／ショウゲート

<テリー・ギリアム監督は、よほどついてない男？>

本作で謎の青年トニーを演ずる主演俳優ヒース・レジャーが、撮影途中の2008年1月22日突然死亡。そんな事態になれば、本作の完成は不可能で製作中止。そうなるのが普通だが、ヒース・レジャーとテリー・ギリアム監督の人脈によってまずジョニー・デップの代役が決まり、さらにジュード・ロウとコリン・ファレルの代役が決まって本作が完成したのはご同慶の至り。

なお、ヒース・レジャーの死亡が鏡をすり抜ける前の部分の撮影終了後だったことは不幸中の幸いだった。つまり、自分の願望を具現化した幻想の世界では、魔法の鏡を通り抜けたトニー（ヒース・レジャー）の顔が変わってもおかしくないから、逆に3人の代役がピッタリ？そんな風に本作は何から何までうまくコトが運んだが、テリー・ギリアム監督が撮影中止の危機に追い込まれたのは、構想10年、制作費50億円をかけた『The Man Who Killed Don Quixote』の撮影が、相次ぐトラブルでわずか6日間で頓挫してしまった時に続く2度目。幸いこの時も、頓挫した映画の製作現場を描いた映画『ロスト・イン・ラ・マンチャ』（01年）を完成させるによって何とかお茶を濁すことができた（？）からラッキー（『シネマルーム3』183頁参照）。ちなみに、テリー・ギリアム監督の『The Man Who Killed Don Quixote』製作の意欲は『ロスト・イン・ラ・マンチャ』完成後も衰えず、2011年には遂に『The Man Who Killed Don Quixote』が公開されるというからすごい。

それにしても、2度も撮影中止の危機に追い込まれたテリー・ギリアム監督はよほどついてない男？

<ヒース・レジャーは、あの時から私の目に>

私はテリー・ギリアム作品として、ずっと昔に『12モンキーズ』（95年）を観た記憶があるが、評論を書いたのは前述の『ロスト・イン・ラ・マンチャ』と『ブラザーズ・グリム』（05年）の2本だけ。

『ブラザーズ・グリム』ではマット・デモンとヒース・レジャーが兄弟役で共演したが、私はこの評論で、「同様に、いやそれ以上にいい味を出していたのが、弟のジェイコブを演じたヒース・レジャー」と書き、ヒース・レジャーの演技に注目していた。

さらに、「『チョコレート』（01年）、『サハラに舞う羽根』（02年）に出演しているが、マット・デモンほど有名ではない彼が、この映画では主役（？）のマット・デモンを食うような見事な演技を見せている。ヘンなロマンチスト、ヘンな文学者、ヘンな科学者の姿の他、いつのまにかアンジェリカに示す恋心やウィルに対する嫉妬心など、実にうまくその心理のヒダを観客に見せてくれている。こりゃひょっとして彼はアカデミー賞助演男優賞にノミネートされるかも・・・？」と書いた（『シネマルーム8』286頁参照）。しかし、その後の『ブロークバック・マウンテン』（05年）や『ダークナイト』（08年）等での彼の出世ぶりは皆様ご承知のとおりだが・・・。

<テリー・ギリアム監督の世界は好き嫌いが？>

それはともかく『ブラザーズ・グリム』では、私より9歳も年上のおじさんとは思えないテリー・ギリアム監督の創造力や幻想的な世界観にビックリし、「ギリアム監督が創り出す不思議な世界に拍手！」と書いた（同上）が、その特徴は本作でも顕著。もっとも、『ブラザーズ・グリム』は「本場ヨーロッパの童話の楽しさとコワさ（？）をファンタジック（奇想天外？）に描いた非常に珍しい作品」（同上）だったが、『Dr. パルナサス』は悪魔との取引によって永遠の命を持つことになったパルナサス博士（クリストファー・プラマー）が鏡の中を通り抜けた人間の夢を具現化するという物語だから、そこに登場するのは何でもありの、糸が切れた風のような幻想の世界。したがって、そういうワケのわからない世界があまり好きではない私は、途中からうんざりさせられたが、子供たちはこんな映画が大好き。

そう考えれば、本作は私のような理屈っぽい大人が観る映画ではなく、創造力が豊かで頭が柔軟な子供たちが観るべき映画？どうしてもテリー・ギリアム監督の世界は好き嫌いが・・・。

<まずは、旅芸人一座の紹介から>

映画冒頭の舞台は、2007年のロンドン。その街角に巨大な馬車が登場し、奇妙な舞台が開かれたかと思うと、奇妙な服装をした旅芸人たちが必死で呼び込みをやり始めた。しかし、こんな怪しげな一座をわざわざ金を払って見ようとする客がないのは当然だ。

旅芸人の座長は年齢が1000歳以上だという老人パルナサス博士だが、その座っている姿はなぜか私にはかつての麻原彰晃とダブる感じ？軽妙なセリフで必死に呼び込みをしている青年がアントン（アンドリュー・ガーフィールド）で、一座の華となる売りは博士の美しい娘ヴァレンティナ（リリー・コール）。そして、何かと便利屋的に駆け回っているのが、小人のパーシー（ヴァーン・トロイヤー）だ。

<ストーリー形成の軸は？悪魔との取引とは？>

テリー・ギリアム監督は映画冒頭でそんな旅芸人の一座を紹介した後、パルナサス博士が姿は老人なのに、なぜ不死の力を持っているのか？そしてまた、彼が悪魔のMr. ニック（トム・ウェイツ）とどんな約束を交わしたのか、を少しずつ説明していく。

パルナサス博士が悪魔と交わした約束は、彼が下界で一人の女性と恋に落ちた時、死と若さを手に入れるために一人娘ヴァレンティナが16歳になったら悪魔に差し出すというとんでもないものだったが、そんな内容が明らかになるのは物語後半になってから。もちろんパルナサス博士はそんな約束をしたことを今は後悔し苦しみ続けているのだが、さてこの約束の履行をめぐる2人の闘いは？

本作のストーリー形成の軸はこれだが、さあそこに本作の主人公トニー（ヒース・レジャー）はいつからいかなる役割を？

<トニーの登場と「現実の世界」における役割は？>

プロローグの後、一気に物語が展開するのは、橋から首を吊られていた若い男トニーを、アントンとパーシー、ヴァレンティナが協力して救い出し、一座の馬車に乗せてから。座長の「どうせ死んでいるのだから、放っておけ」との命令を無視して、この記憶喪失の男トニーを一座の中に迎えたため、以降何かと騒動が起こることになる。テリー・ギリアム監督はヒース・レジャーを主役に迎えて、ロンドンを舞台にしたこんなシーンを順調に撮り続け、次はいよいよ鏡を通り抜けた後の撮影に臨もうとした時点でヒース・レジャーの死亡が伝えられたらしい。

このロンドンを舞台とした旅芸人の一座との絡みをヒース・レジャーが演じたわけだが、その前半は記憶喪失に戸惑う男を、そして後半は旅芸人たちに溶け込み、呼び込みの才能や金儲けの才能を発揮する「現実の世界」におけるトニーの役を軽妙に演じている。とりわけ、秘かにヴァレンティナに対して恋心を抱くアントンがトニーに示す対抗心や、突如現れた謎いっばいだがハンサムで魅力的な男トニーに何かと好意を示すヴァレンティナとの距離感が面白い。ヴァレンティナは16歳の誕生日を目の前にした女の子だが、パルナサス博士とMr. ニックの約束によって誕生日にはどんなぞえらいことが起こるの？ちなみに、ヴァレンティナを演ずるリリー・コールは、21歳にして資産20億円と言われている本職がスーパーモデルの女性。そのうえ、近時ケンブリッジ大学に入学したという富・美貌・知性のすべてを備えた女性。しかし、たしかに胸はデカイものの、私の目には全体的な魅力はイマイチ？

<「夢の世界」における三人三様のトニーの役割は？>

それはともかく、撮影途中でヒース・レジャーが死亡してしまったため、鏡を通り抜けた後の「夢の世界」におけるトニーをジョニー・デップ、コリン・ファレル、ジュード・ロウの3人が三人三様に演じたわけだが、さてその役割は？

「現実の世界」におけるしっかりしたストーリー構成（？）に比べると、「夢の世界」におけるそれは八チャメチャ気味だが、ジョニー・デップらをはじめとする代役3人の演技はさすがに達者なもの。もちろん3人は「現実の世界」におけるヒース・レジャーの演技を見たうえでその代役を引き受けたわけだが、私が見る限り、それってやっぱり無理があるのでは？

<ロシアのギャングが登場すると、ドタバタ劇に？>

ハリウッド映画ではロシアのギャングは最大の悪人として描かれることが多い（？）が、本作でもそれを踏襲。トニーが橋の上からクビを吊られていたのは、どうやら彼がロシアのギャングから金を奪ったためらしい。したがって、ある日旅芸人の一座で呼び込みをやっているトニーの姿を発見したギャングたちがトニーを捕まえようとしたのは当然だが、そこから始まる後半の幻想世界はある意味ドタバタ劇。

私の中学生時代、テレビで大ヒットしていた国民的番組が、藤田まこと、白木みのるらが登場する『てなもんや三度笠』だったが、本作のドタバタぶりは巨額の費用をかけたCGと粗末な舞台という違いはあるが、いかにも『てなもんや三度笠』風？この幻想世界の映像の売りモノは、雲まで届く巨大なハシゴやそれを使った竹馬などだが、これを楽しい夢物語と思うか、それとも単なるドタバタ劇と思うかは観客次第。さて、あなたは？

2010（平成22）年2月16日記